透木

〔茶道筌蹄三〕釜添品目

透木　利休形は厚朴　元伯形は桐、いづれも爐風呂共あり、山中氏所持に、元伯書付大中小三ッあるよし、

〔茶傳集十〕一敷木（風爐）（透木とも云）　樫ノ白木　長貳寸　巾七分　厚五分

一敷木（爐）　長三寸八分　巾八分五厘　厚四分　木右同

〔茶道要錄上主法〕風爐之事

一透木之事、是ハ刃釜カ筥被ノ釜ヲ風爐ニ掛ル時、透木ト云物ヲ用、厚朴ニテ長サ二寸バカリ、厚サ四五分、幅六七分ニシテ、二ッ兩脇ニ可置、釜ノ大小ニ因テ見合有ベシ、常ニ仕掛ルニハ、木ヲ略シテ、鐵ニテ鎹ノ如クシテ漆付ニス、大サ二分四方程タルベシ、三ッヲ以ス、脇二ッ、後ノ眞中ニ一ッ用ユ、

〔槐記〕享保十三年五月七日、參候、スキキニ寸法ハナシ、釜ニシタガフ由也、常修院殿（慈胤法親王）ヘ御賴ミ申セシカバ、釜ヲコセヨ、釜ニテ拵テ下サルベキ由ニテ、モライシト仰也、（近衛家熙）サレバ釜ノ大小ニヨリテ、木ノ長短コレアルコトニテ候ヤト窺フ、緣ノ廣狹ニヨルコトヽ見ヘタリト仰ラル、スキ木シキ木ト申スコト候ヤ、仰ニ、スキ木三本ト云、是モ今ハ桐ニテスルソウ也、古ヘハ厚朴也ト兼テ仰ラレシ、長山公ノ御聞書ニ宗旦傳ナリトアソバス、

自在

〔和漢茶誌三〕自在　和語也

或人曰、本野人煮羹之具也、取用爲茶房器玩、其上懸天井、下至地爐、活火沸騰則上之、老湯火冷則下之、可謂升降自由、動靜自在者、其雅宜哉、

其制用竹爲幹、懸下在鍵、其竹以四尺七寸或八寸、不過七節八節、若天井高、竹不足、則以鎖助之、其所釣木以茱萸木、按人未滿五十則不許用之、然爲宗師者、不在此例也、